

3. 患者の選択規準

手術が施行された子宮体がん再発高危険群

3.1 適格規準

- 1) 原発巣が子宮体がん(肉腫、がん肉腫を除く)であることが組織学的に確認されている患者
- 2) 少なくとも子宮全摘出術、両側付属器切除術と骨盤リンパ節郭清が施行され、残存腫瘍の長径が 2 cm 以下である患者
- 3) 原発巣からの摘出標本の病理組織診断によって下記のいずれかの条件を満たす子宮体がん患者
 - ・筋層浸潤 1/2 を超える手術進行期 I-II 期で、組織学的分化度 Grade 2 あるいは 3*
 - * 予後不良の組織型(漿液性、明細胞、未分化)についてはGrade3 として取扱う。
それ以外の組織型については、腺癌成分の形態または細胞異型によりGradeを判定すること。
 - ・手術進行期 III 期
 - ・腹腔を超えた部位への遠隔転移*を認めない手術進行期 IV 期
 - * 例) 胸腔、縦隔あるいは頸部リンパ節等への転移
- 4) 子宮体がんに対し、化学療法および放射線療法による前治療が行われていない患者
- 5) ホルモン療法の最終治療日より、登録時点で 14 日以上経過した患者
- 6) 一般状態(ECOG Performance Status, P.S.)が 0-2 の患者
- 7) 手術施行から 8 週以内に投与開始予定の患者
- 8) 年齢 20 歳以上 75 歳未満の患者(登録時)
- 9) 主要臓器(骨髄、心、肝、腎など)の機能が保持されている患者

以下の検査は、臨床検査値は登録日 14 日以内

好中球数	2,000/mm ³ 以上
血小板数	10 万/mm ³ 以上
ヘモグロビン	9.0 g/dL 以上
AST(GOT)、ALT(GPT)ともに	100 U/L 以下
総ビリルビン	1.5 mg/dL 以下
血清クレアチニン	1.2 mg/dL 以下

(2回以上の測定で確認することが望ましい)

以下の検査は、登録日前 21 日以内または投与開始予定日 28 日以内

クレアチニン・クリアランス	60 mL/min 以上
心電図	正常または無症状かつ治療を要しない程度
LVEF(Left Ventricular Ejection Fraction)	50%以上

- 10) 本試験の参加について文書による同意が本人より得られている患者

3.2 除外規準

- 1) 肉腫成分を含む患者
- 2) 明らかな感染症を有する患者
- 3) 重篤な合併症(心疾患、control 不能な糖尿病、悪性高血圧、出血傾向等)を有する患者
- 4) 5 年未満の無病期間の重複がん既往あるいは、活動性の重複がんを有する患者
- 5) 胸部単純 X 線写真および CT で間質性肺炎または肺線維症が疑われる患者
- 6) 持続的な排液を必要とする胸水、腹水貯留患者
- 7) grade 2 以上の末梢神経障害(運動性・知覚性)をきたしている患者
- 8) grade 2 以上の浮腫(四肢)のある患者(原疾患によって発生する障害は含まない)
- 9) ドキソルビシン(doxorubicin, ADM)による前治療歴がある患者
- 10) ポリソルベート 80 含有製剤、ポリオキシエチレンヒマシ油(クレモホール EL®)含有製剤(シクロス
ポリンなど)および硬化ヒマシ油含有製剤(注射用ビタミン剤など)に対し過敏症の既往歴を有す
る患者
- 11) その他、施設研究責任医師が不相当と判断した場合

4. 薬剤情報

4.1 使用薬剤情報

使用薬剤に関する一次情報は薬剤添付文書（別紙 8）の記載内容とする。薬剤添付文書の改定時には新添付文書を参照のこと。薬剤添付文書は本試験実施計画書に添付したが、最新版は「医薬品医療機器情報提供ホームページ(<http://www.info.pmda.go.jp/>)」で参照できるので、常に最新情報を把握するよう努めること。

4.2 薬剤の供給

市販品を使用する。

4.2.1 パクリタキセル (paclitaxel, PTX)

[1] 製品名 : タキソール®注射液 30mg、タキソール®注射液 100mg

[2] 成分・含量 : 1 バイアル 5、16.7mL 中に各々パクリタキセル 30、100mg を含有する。

[3] 重大な副作用

1) ショック、アナフィラキシー様症状

ショック(0.2%)、アナフィラキシー様症状(0.3%)を起こすことがあるので観察を十分に行い、呼吸困難、胸痛、低血圧、頻脈、徐脈、潮紅、血管浮腫、発汗等の異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

2) 白血球減少等の骨髄抑制

白血球減少(59.7%)、好中球減少(53.5%)、貧血[ヘモグロビン減少(27.4%)、ヘマトクリット値減少(5.2%)、赤血球減少(6.4%)等]、血小板減少(10.6%)、汎血球減少等があらわれることがあるので、末梢血液の観察を十分に行い、異常が認められた場合には、減量、休薬等適切な処置を行うこと。また、骨髄抑制の持続により、感染症[尿路感染(2.2%)、上気道感染(4.4%)、敗血症(0.9%)、带状疱疹(1.1%)、肺炎(1.0%)等]の併発が報告されている。なお、国内の3時間点滴静注による第Ⅱ相試験(本剤単独)においてグレード3以上の白血球減少、好中球減少の発現率はそれぞれ43.7%(163/373)、76.3%(284/372)であった。

3) 末梢神経障害、麻痺

しびれ等の末梢神経障害(41.2%)、麻痺(0.1%)、片麻痺(0.1%未満)、不全麻痺があらわれることがあるので、このような症状があらわれた場合には、減量、休薬等適切な処置を行うこと。

4) 間質性肺炎、肺線維症

間質性肺炎(0.5%)、肺線維症(頻度不明)があらわれることがあるので、観察を十分に行い、発熱、咳嗽、呼吸困難及び胸部X線検査異常等が認められた場合には投与を中止し、副腎皮質ホルモン剤の投与等の適切な処置を行うこと。

5) 急性呼吸窮迫症候群

急性呼吸窮迫症候群(0.1%未満)があらわれることがあるので、観察を十分に行い、急速に進行する呼吸困難、低酸素症、両側性びまん性肺浸潤影等の胸部X線異常等が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

6) 心筋梗塞、うっ血性心不全、心伝導障害、肺塞栓、血栓性静脈炎、脳卒中、肺水腫

心筋梗塞(0.1%未満)、うっ血性心不全(0.1%未満)、心伝導障害(頻度不明)、肺塞栓(0.1%)、血栓性静脈炎(0.4%)、脳卒中(0.1%未満)、肺水腫(0.1%未満)があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止すること。

7) 難聴、耳鳴

難聴(0.2%)、耳鳴(0.4%)があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止すること。

8) 消化管壊死、腸管穿孔、消化管出血、消化管潰瘍

消化管壊死(頻度不明)、腸管穿孔(0.1%未満)、消化管出血(0.1%未満)、消化管潰瘍(0.1%)が

あらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。

9) 重篤な腸炎

出血性大腸炎、偽膜性大腸炎、虚血性大腸炎等が現れることがあるので、観察を十分に行い、激しい腹痛・下痢等があらわれた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

10) 腸管閉塞、腸管麻痺

腸管閉塞(1.7%)、腸管麻痺(0.1%) (食欲不振、悪心・嘔吐、著しい便秘、腹痛、腹部膨満あるいは腹部弛緩及び腸内容物のうっ滞等)を来し、麻痺性イレウスに移行することがあるので、腸管閉塞、腸管麻痺があらわれた場合には投与を中止し、腸管減圧法等の適切な処置を行うこと。

11) 肝機能障害、黄疸

肝機能障害(4.4%)、黄疸があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止すること。

12) 肺炎

肺炎(0.1%未満)があらわれることがあるので、観察を十分に行い、血清アミラーゼ値等に異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。

13) 急性腎不全

急性腎不全(0.2%)があらわれることがあるので、観察を十分に行い、BUN、血清クレアチニン、クレアチニン・クリアランス値等に異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。

14) 皮膚粘膜眼症候群(Stevens-Johnson 症候群)、中毒性表皮壊死症(Lyell 症候群)

皮膚粘膜眼症候群(Stevens-Johnson 症候群)、中毒性表皮壊死症(Lyell 症候群)があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

15) 播種性血管内凝固症候群(DIC)

播種性血管内凝固症候群(DIC)(0.1%)があらわれることがあるので、観察を十分に行い、血小板数、血清 FDP 値、血漿フィブリノゲン濃度等の血液検査に異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

[4] その他の副作用

過敏症 発疹(5%~20%未満)、発赤(5%未満)

循環器 低血圧(5%~20%未満)、不整脈、頻脈、徐脈、期外収縮、高血圧、心悸亢進、心電図異常、心房細動、心室細動、心肥大、狭心症(5%未満)

消化器 悪心・嘔吐(33.8%)、下痢、食欲不振、口内炎、便秘(5%~20%未満)、消化不良、鼓腸放屁、胃炎、直腸疼痛、嚥下障害、直腸障害、歯肉炎、腹部膨満感、舌苔、歯肉痛(5%未満)

肝臓 AST(GOT)上昇、Al-P 上昇、LDH 上昇、ALT(GPT)上昇、(5%~20%未満)、ビリルビン上昇(5%未満)

腎臓 電解質異常(5%~20%未満)、BUN 上昇、クレアチニン上昇、蛋白尿(5%未満)

皮膚 脱毛(42.3%)、斑状丘疹性皮疹、爪変色(20%以上又は頻度不明)、掻痒、皮膚疾患、皮膚潰瘍、蕁麻疹、爪の障害、表皮剥離、色素沈着、皮膚腫脹(5%未満)

精神神経系 めまい、不眠、不安、うつ病、傾眠、思考異常、振戦、失神、激越、神経学的疾患、痙攣、運動失調、健忘症、緊張低下、意識障害、寡動、言語障害、緊張亢進、精神症状、譫妄、眼振、不随意運動、嘔声、気分変動(5%未満)

感覚 暗点、光視症(20%以上又は頻度不明)、味覚倒錯、視力異常、味覚喪失、眼痛、耳痛、舌異常感(5%未満)

呼吸器 呼吸困難(5%~20%未満)、低酸素症(5%未満)

全身症状 無力症、腹痛、倦怠感、頭痛(5%~20%未満)、浮腫、疼痛、インフルエンザ様症候群、腹部腫脹、さむけ、体重増加、体重減少(5%未満)

筋骨格 関節痛(30.7%) 筋肉痛(27.1%)、骨痛、背部痛(5%~20%未満)、頸部痛、腰痛(5%未満)

その他 脱水(20%以上又は頻度不明)、発熱、潮紅(5%~20%未満)、胸痛、咳増加、出血、注射部反応、末梢性浮腫、総蛋白減少、アルブミン減少、骨盤痛、発汗、吃逆、排尿困難、血尿、眼疾患、口渇、不正出血、結膜炎、無月経、注射部痛、酩酊感、高血糖、

尿失禁、尿閉、低血糖、出血性膀胱炎、喀痰増加、結膜出血、眼乾燥、角膜炎(5%未満)

4.2.2 ドセタキセル (docetaxel, DOC)

4.2.2.1

[1] 製品名 :タキソテール®注

[2] 成分・含量 :80mg 製剤 1 バイアル 2mL 中にドセタキセル水和物 85.35mg
(ドセタキセルとして 80mg)を含有する

20mg 製剤 1 バイアル 0.5mL 中にドセタキセル水和物 21.34mg
(ドセタキセルとして 20mg)を含有する

[3] 重大な副作用

- 1) 骨髄抑制:骨髄抑制[白血球減少(60mg/m²:97.2%、70mg/m²:97.9%)、好中球減少(60mg/m²:95.2%、70mg/m²:98.4%)、ヘモグロビン減少(60mg/m²:50.9%、70mg/m²:78.1%)、血小板減少(60mg/m²:11.7%、70mg/m²:13.0%)等]があらわれるので、血液検査を十分に行い、異常が認められた場合には、投与間隔の延長、減量、休薬等の適切な処置を行うこと。また、本剤の投与にあたっては G-CSF 製剤の適切な使用に関しても考慮すること。
- 2) ショック症状(0.1%)・アナフィラキシー様反応(0.3%):呼吸困難、気管支痙攣、血圧低下、胸部圧迫感、発疹等のショック症状・アナフィラキシー様反応があらわれることがあるので、十分に観察を行い、関連する徴候が認められた場合には、投与を中止するなど適切な処置を行うこと。
- 3) 黄疸、肝不全、肝機能障害(頻度不明):黄疸、肝不全、AST(GOT)・ALT(GPT)・Al-P の著しい上昇等の重篤な肝障害があらわれることがあるので、肝機能検査の値に注意して観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。
- 4) 急性腎不全(頻度不明):急性腎不全等の重篤な腎障害があらわれることがあるので、腎機能検査の値に注意して観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。
- 5) 間質性肺炎(0.2%)、肺線維症(頻度不明注):間質性肺炎、肺線維症があらわれることがある。また、放射線療法を併用している患者で同様の臨床症状(放射線肺臓炎)があらわれることがある。観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。
- 6) 心不全(0.2%):心不全があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。
- 7) 播種性血管内凝固症候群(DIC)(0.1%):播種性血管内凝固症候群(DIC)があらわれることがあるので、血小板数、血清 FDP 値、血漿フィブリノゲン濃度等の血液検査を適宜行うこと。症状があらわれた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
- 8) 腸管穿孔(0.1%未満)、胃腸出血(0.4%)、虚血性大腸炎(頻度不明)、大腸炎(0.1%):腸管穿孔、胃腸出血、虚血性大腸炎、大腸炎があらわれることがあるので、腹痛、吐血、下血、下痢等の症状があらわれた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。
- 9) イレウス(頻度不明):イレウスがあらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。
- 10) 急性呼吸促迫症候群(頻度不明):急性呼吸促迫症候群があらわれることがあるので、呼吸障害等がみられた場合には観察を十分に行い、投与を中止するなど適切な処置を行うこと。
- 11) 急性膵炎(頻度不明):急性膵炎があらわれることがあるので、観察を十分に行い、血清アミラーゼ値等に異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。
- 12) 皮膚粘膜眼症候群(Stevens-Johnson 症候群)、中毒性表皮壊死症(Lyell 症候群)、多形紅斑(頻度不明):皮膚粘膜眼症候群(Stevens-Johnson 症候群)、中毒性表皮壊死症(Lyell 症候群)、多形紅斑等の水疱性・滲出性皮疹があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。
- 13) 心タンポナーデ、肺水腫(頻度不明)、浮腫・体液貯留(0.7%):心タンポナーデ、肺水腫、緊急ドレナージを要する胸水、腹水等の重篤な浮腫・体液貯留が報告されている。
- 14) 心筋梗塞、静脈血栓塞栓症(頻度不明):心筋梗塞、静脈血栓塞栓症が報告されている。

- 15) 感染症(1.4%):敗血症、肺炎等の感染症が報告されている。
- 16) 抗利尿ホルモン不適合分泌症候群(SIADH)(頻度不明):抗利尿ホルモン不適合分泌症候群(SIADH)があらわれることがあるので、低浸透圧血症を伴う低ナトリウム血症、尿中ナトリウム排泄の持続、意識障害等の症状があらわれた場合には投与を中止し、水分摂取の制限等適切な処置を行うこと。
- 17) その他、重篤な口内炎等の粘膜炎、血管炎、末梢神経障害、四肢の脱力感等の末梢性運動障害、Radiation Recall現象が報告されている。
- [4] その他の副作用

消化器	食欲不振(50%以上)、悪心・嘔吐、下痢、口内炎、便潜血(5~50%未満)、腹痛、腹部膨満感、便秘、舌炎、口内乾燥等(5%未満)、胃・十二指腸潰瘍、食道炎、しゃっくり(頻度不明)
過敏症	アレルギー、発赤(5~50%未満)、痒痒感、潮紅等(5%未満)
皮膚	脱毛(50%以上)、皮疹(5~50%未満)、色素沈着、爪疾患(爪剥離、変形、変色、爪下出血、爪下血腫、爪下膿瘍等)等(5%未満)、皮膚剥離、手足症候群、皮膚エリテマトーデス(頻度不明)
精神・神経系	しびれ感(5~50%未満)、頭痛、意識喪失、見当識障害、めまい、昏迷、難聴、耳鳴、味覚異常、羞明、視力異常、不眠等(5%未満)、傾眠、視覚障害(閃光、光のちらつき、暗点)(頻度不明)
神経・筋症状	筋肉痛、関節痛、筋力低下、脱力感、背部痛、痙攣等(5%未満)
肝臓	AST(GOT)・ALT(GPT)・ γ -GTP・Al-P・LDH 上昇(5~50%未満)、総ビリルビン上昇(5%未満)
腎臓	蛋白尿、K・Na・Cl・Caの異常、BUN 上昇(5~50%未満)、クレアチニン上昇、尿糖、血尿、乏尿、頻尿等(5%未満)
循環器	血圧低下、血圧上昇、不整脈、動悸、頻脈等(5%未満)
呼吸器	呼吸困難、咽頭炎、咳嗽等(5%未満)、血痰(頻度不明)
その他	全身倦怠感(50%以上)、発熱、浮腫、総蛋白・アルブミン・A/G 比・CK(CPK)異常(5~50%未満)、静脈炎、疼痛、胸痛、全身痛、熱感、腰痛、鼻出血、ほてり、流涙等(5%未満)、涙道閉塞、脱水(頻度不明)

4.2.2.2 ドセタキセル用添付溶解液

- [1] 成分・含量 80mg 製剤 1 バイアル 6mL 中に 95%エタノール 764.4mg を含有する
20mg 製剤 1 バイアル 1.5mL 中に 95%エタノール 191.1mg を含有する

4.2.3 シスプラチン (cisplatin, CDDP)

4.2.3.1

- [1] 製品名 :ブリプラチン®注、ランダ®注
- [2] 成分・含量 :1 バイアル 20、50、100mL 中に各々シスプラチン 10、25、50mg を含有する。
- [3] 重大な副作用
- 急性腎不全(0.1%未満)
急性腎不全等の重篤な腎障害があらわれることがあるので、頻回に臨床検査を行うなど、患者の状態を十分に観察すること。BUN、血清クレアチニン、クレアチニン・クリアランス値等に異常が認められた場合は投与を中止し、適切な処置を行うこと。その他、血尿、尿蛋白、乏尿、無尿があらわれることがある。
 - 汎血球減少(0.1%未満)等の骨髄抑制
汎血球減少、貧血、白血球減少、好中球減少、血小板減少等があらわれることがあるので、頻回に血液検査を行うなど観察を十分に行い、異常が認められた場合には減量、休薬、中止等の適切な処置を行うこと。
 - ショック、アナフィラキシー様症状(0.1%未満)
ショック、アナフィラキシー様症状を起こすことがあるので、観察を十分に行い、チアノーゼ、呼吸困

難、胸内苦悶、血圧低下等の症状があらわれた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

- 4) 聴力低下・難聴(1.4%)、耳鳴(1.7%)
高音域の聴力低下、難聴、耳鳴等があらわれることがある。また、投与量の増加に伴い聴器障害の発現頻度が高くなり、特に1日投与量では80mg/m²以上で、総投与量では300mg/m²を超えるとその傾向は顕著となるので十分な観察を行い投与すること。
 - 5) うっ血乳頭、球後視神経炎、皮質盲(すべて0.1%未満)
うっ血乳頭、球後視神経炎、皮質盲等の視覚障害があらわれることがあるので、異常が認められた場合は投与を中止すること。
 - 6) 脳梗塞(0.1%未満)、一過性脳虚血発作(0.1%未満)
脳梗塞、一過性脳虚血発作があらわれることがあるので、異常が認められた場合は投与を中止し、適切な処置を行うこと。
 - 7) 溶血性尿毒症症候群(0.1%未満)
血小板減少、溶血性貧血、腎不全を主徴とする溶血性尿毒症症候群があらわれることがあるので、定期的に血液検査(血小板、赤血球等)及び腎機能検査を行うなど観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
 - 8) 心筋梗塞、狭心症、うっ血性心不全、不整脈(すべて0.1%未満)
心筋梗塞、狭心症(異型狭心症を含む)、うっ血性心不全、不整脈(心室細動、心停止、心房細動、徐脈等)があらわれることがあるので、観察を十分に行い、胸痛、失神、息切れ、動悸、心電図異常等が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
 - 9) 溶血性貧血(0.1%未満)
クームス陽性の溶血性貧血があらわれることがあるので、異常が認められた場合には投与を中止すること。
 - 10) 間質性肺炎(0.1%未満)
発熱、咳嗽、呼吸困難、胸部 X 線異常等を伴う間質性肺炎があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、副腎皮質ホルモン剤の投与等の適切な処置を行うこと。
 - 11) 抗利尿ホルモン不適合分泌症候群(0.1%未満)
低ナトリウム血症、低浸透圧血症、尿中ナトリウム排泄量の増加、高張尿、痙攣、意識障害等を伴う抗利尿ホルモン不適合分泌症候群(SIADH)があらわれることがあるので、このような症状があらわれた場合には投与を中止し、水分摂取の制限等の適切な処置を行うこと。
 - 12) 劇症肝炎(0.1%未満)、肝機能障害(頻度不明)、黄疸(0.1%未満)
劇症肝炎、肝機能障害、黄疸があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には減量、休薬、中止等の適切な処置を行うこと。
 - 13) 消化管出血、消化性潰瘍、消化管穿孔(すべて0.1%未満)
消化管出血、消化性潰瘍、消化管穿孔があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には減量、休薬、中止等の適切な処置を行うこと。
 - 14) 急性膵炎(0.1%未満)
急性膵炎があらわれることがあるので、観察を十分に行い、血清アミラーゼ値、血清リパーゼ値等に異常が認められた場合には投与を中止すること。
 - 15) 高血糖(0.1%未満)、糖尿病の悪化(0.1%未満)
高血糖、糖尿病の悪化があらわれることがあり、昏睡、ケトアシドーシスを伴う重篤な症例も報告されているので、血糖値や尿糖に注意するなど観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。
 - 16) 横紋筋融解症(0.1%未満)
横紋筋融解症があらわれることがあるので、CK(CPK)上昇、血中及び尿中ミオグロビン上昇等が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
- [4] その他の副作用
- | | |
|-----|-----------------------------------|
| 消化器 | 悪心・嘔吐、食欲不振(10%以上)、下痢、口内炎(1~10%未満) |
| | イレウス、腹痛、便秘、腹部膨満感、口角炎(1%未満) |
| 過敏症 | 発疹、ほてり(1%未満) |

精神神経系	末梢神経障害(しびれ、麻痺等)(1~10%未満) 言語障害、頭痛、味覚異常、意識障害、見当識障害、痙攣、レールミッテ徴候(1%未満)
肝臓	AST(GOT)上昇、ALT(GPT)上昇、Al-P上昇、LDH上昇(1~10%未満) ビリルビン上昇、 γ -GTP上昇(1%未満)
循環器	動悸、頻脈、心電図異常、レイノー様症状(1%未満)
電解質	血清ナトリウム、カリウム、クロール、カルシウム、リン、マグネシウム等の異常(1~10%未満)、テタニー様症状(1%未満)
皮膚	脱毛(10%以上)、掻痒、色素沈着(1%未満)
その他	全身倦怠感(10%以上)、発熱(1~10%未満)、眩暈、疼痛、全身浮腫、血圧低下、吃逆、高尿酸血症、胸痛、脱水(1%未満)

4.2.3.2

- [1] 製品名 : プラトシン注、シスプラチン注「マルコ」
 [2] 成分・含量 : 1バイアル20、50、100mL中に各々CDDP 10、25、50mgを含有する。
 [3] 重大な副作用およびその他の副作用
 資料 プラトシン注、シスプラチン注「マルコ」の薬剤添付文書を参照のこと。

4.2.4 カルボプラチン (carboplatin, CBDCA)

4.2.4.1

- [1] 製品名 : 注射用パラプラチン®150mg、パラプラチン®注射液
 [2] 成分・含量 : 1バイアル 5、15、45 mL中に各々カルボプラチン 50、150、450 mgを含有する。
 [3] a) 重大な副作用
- 汎血球減少(0.1%未満)等の骨髄抑制
汎血球減少、貧血(ヘモグロビン減少、赤血球減少、ヘマトクリット値減少)、白血球減少、好中球減少、血小板減少、出血等があらわれることがあるので、末梢血液の観察を十分に行い、異常が認められた場合には、減量、休薬、中止等適切な処置を行うこと。
 - ショック、アナフィラキシー様症状(0.1%未満)
ショック、アナフィラキシー様症状を起こすことがあるので、観察を十分に行い、チアノーゼ、呼吸困難、胸内苦悶、血圧低下、気管支痙攣等があらわれた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。なお、本剤の投与回数を重ねると、ショック、アナフィラキシー様症状の発現頻度が高くなる傾向もみられる。
 - 間質性肺炎(0.1%)
発熱、咳嗽、呼吸困難、胸部 X 線異常等を伴う間質性肺炎があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、副腎皮質ホルモン剤の投与等の適切な処置を行うこと。
 - 急性腎不全(0.1%未満)、ファンコニー症候群(頻度不明)
急性腎不全、ファンコニー症候群等があらわれることがあるので、観察を十分に行い、BUN、血清クレアチニン、クレアチニン・クリアランス値等に異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
 - 肝不全、肝機能障害、黄疸(いずれも頻度不明)
肝不全、肝機能障害、黄疸があらわれることがあるので、定期的に検査を行うなど観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
 - 消化管壊死、消化管穿孔、消化管出血、消化管潰瘍(いずれも頻度不明)
消化管壊死、消化管穿孔、消化管出血、消化管潰瘍があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
 - 出血性腸炎、偽膜性大腸炎(頻度不明)
出血性腸炎、偽膜性大腸炎等があらわれることがあるので、観察を十分に行い、激しい腹痛・下痢等があらわれた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
 - 麻痺性イレウス(0.1%未満)

腸管麻痺(食欲不振、嘔気・嘔吐、著しい便秘、腹痛、腹部の膨満あるいは弛緩及び腸内容物のうっ滞等)を来し、麻痺性イレウスに移行することがあるので、腸管麻痺があらわれた場合には投与を中止し、腸管減圧法等の適切な処置を行うこと。

9) 脳梗塞(0.1%未満)、肺梗塞(頻度不明)

脳梗塞、肺梗塞があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

10) 血栓・塞栓症(頻度不明)

血栓・塞栓症(肺塞栓、脳血栓、その他の動脈又は静脈血栓症等)があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

11) 心筋梗塞、うっ血性心不全(頻度不明)

心筋梗塞、うっ血性心不全があらわれることがあるので、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

12) 溶血性尿毒症症候群(頻度不明)

血小板減少、溶血性貧血、腎不全を主徴とする溶血性尿毒症症候群があらわれることがあるので、定期的に血液検査(血小板、赤血球等)及び腎機能検査を行うなど観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

13) 急性呼吸窮迫症候群(頻度不明)

急性呼吸窮迫症候群があらわれることがあるので、観察を十分に行い、急速に進行する呼吸困難、低酸素症、両側性びまん性肺浸潤影等の胸部X線異常等が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

14) 播種性血管内凝固症候群(DIC)(頻度不明)

播種性血管内凝固症候群(DIC)があらわれることがあるので、観察を十分に行い、血小板数、血清FDP値、血漿フィブリノゲン濃度等の血液検査に異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

15) 急性膵炎(頻度不明)

急性膵炎があらわれることがあるので、観察を十分に行い、血清アミラーゼ値、血清リパーゼ値等に異常が認められた場合には投与を中止すること。

b) 重大な副作用(類薬)

1) 聴力低下、難聴、耳鳴

シスプラチンで、高音域の聴力低下、難聴、耳鳴等があらわれることがあるので、十分な観察を行い投与すること。

2) うっ血乳頭、球後視神経炎、皮質盲

シスプラチンで、まれにうっ血乳頭、球後視神経炎、皮質盲等の視覚障害があらわれることがあるので、異常が認められた場合には投与を中止すること。

3) 溶血性貧血

シスプラチンで、クームス陽性の溶血性貧血があらわれることがあるので、異常が認められた場合には投与を中止すること。

[4] その他の副作用

消化器 悪心・嘔吐、食欲不振(10%以上又は頻度不明)、下痢、口内炎、腹痛、便秘(1~10%未満)、口渇(1%未満)

腎臓 血尿、蛋白尿(1~10%未満)、乏尿(1%未満)

過敏症 蕁麻疹(10%以上又は頻度不明)、発疹(1~10%未満)、掻痒感(1%未満)

精神神経系 末梢神経障害(しびれ等)、頭痛(1~10%未満)、耳鳴、聴力低下、視力障害、眩暈、痙攣、異常感覚、味覚異常、神経過敏、不安、不眠(1%未満)

肝臓 ALT(GPT)上昇(10%以上又は頻度不明)、AST(GOT)上昇、Al-P上昇、ビリルビン上昇、LDH上昇、 γ -GTP上昇(1~10%未満)

循環器 心電図異常(期外収縮)、心悸抗進、血圧上昇、血圧低下、不整脈(頻脈、徐脈、心房細動、心房粗動、房室ブロック)(1%未満)

電解質 血清ナトリウム、カリウム、クロール、カルシウム、リン、マグネシウム等の異常(1~10%未満)、抗利尿ホルモン分泌異常症候群(1%未満)

皮膚 脱毛(10%以上又は頻度不明)、色素沈着、爪の変色、皮膚疾患(1%未満)

そ の 他 全身倦怠感、無力症、尿酸上昇、悪寒、脱水、体重減少、アルブミン低下、呼吸困難（10%以上又は頻度不明）、発熱、浮腫（1～10%未満）、疼痛、潮紅、ほてり、胸部不快感、吃逆、注射部位反応（発赤、腫脹、疼痛等）、低蛋白血症（1%未満）

4.2.4.2

[1] 製 品 名 :カルボメルク注射液1%

[2] 成分・含量:1バイアル5、15、45mL中に各々 50、150、450mgを含有する。

[3] 重大な副作用およびその他の副作用

資料 カルボメルク注射液1%の薬剤添付文書を参照のこと。

4.2.5 ドキソルビシン (doxorubicin, ADM)

[1] 製 品 名 :アドリアシン®注用10

[2] 成分・含量:1バイアル中に日局塩酸ドキソルビシン10mg(力価)を含有する。

[3] 重大な副作用

- 1) 心筋障害、更に心不全があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止すること。また、総投与量が $500\text{mg}/\text{m}^2$ を超えると重篤な心筋障害を起こすことが多いので注意すること。
- 2) 汎血球減少、貧血、白血球減少、好中球減少、血小板減少等の骨髄機能抑制及び出血があらわれることがあるので、定期的に検査を行うなど観察を十分に行い、異常が認められた場合には、投与を中止するなど適切な処置を行うこと。
- 3) ショックがあらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
- 4) 膀胱腔内注入療法によって萎縮膀胱 (0.9%) があらわれることがあるので、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

[4] その他の副作用

心 臓	心電図異常、頻脈 (5%以上)、不整脈、胸痛 (0.1～5%未満)
肝 臓	肝障害 (0.1～5%未満)
腎 臓	蛋白尿 (0.1～5%未満)
消 化 器	食欲不振、悪心・嘔吐、口内炎、下痢 (5%以上)
皮 膚	脱毛 (5%以上)、色素沈着 (0.1～5%未満)
精神神経系	倦怠感、頭痛 (0.1～5%未満)
泌尿器(膀胱時)	頻尿、排尿痛、膀胱炎、血尿 (5%以上)、残尿感 (0.1～5%未満)
呼 吸 器	気胸・血胸 (肺転移症例) (頻度不明)
過 敏 症	発疹 (0.1～5%未満)
そ の 他	発熱 (5%以上)、鼻出血 (0.1～5%未満)

5. 治療計画と症例登録・割付

5.1 試験方法

5.1.1 試験のデザイン

中央登録方式による多施設共同ランダム化第 III 相試験

5.1.2 症例登録

[1]. 登録方法

FAX による中央登録方式

[2]. 登録手順

- ① 適格規準を満たし、除外規準にあてはまらない患者がある場合、施設研究責任医師あるいは施設分担医師は 文書にて同意を取得する。
- ② 「症例登録用紙」(別紙 2) に必要事項を記入の上、JGOG 登録センターへ FAX する。
- ③ JGOG 登録センターでは登録確認票に基づいて登録患者の適格性の再確認を行う。その後、最小化法を用いて A 群、B 群、C 群のいずれかにランダムに割付を行い、「登録結果確認票」(別紙 2) に登録番号、体表面積、投与量を記入の上、施設研究責任医師あるいは施設分担医師に FAX にて返送する。ただし、体表面積・薬剤投与量の算出は施設・担当医師の責任であり、必ず施設においても計算し直し確認すること。
- ④ 施設研究責任医師あるいは施設分担医師は JGOG 登録センターから「登録結果確認票」を受け取ったら 7 日以内、可及的速やかに治療を開始する。

[JGOG 登録センター]

北里大学臨床薬理研究所 臨床試験コーディネーティング部門

〒108-8642

東京都港区白金 5-9-1

TEL: 03-5791-6400

FAX: 0120-579-183 (フリーダイヤル)

受付時間: 月曜日～金曜日 9:00 ~ 17:00

(ただし土曜日・日曜日・祝日、11/5 および 12/28~1/3 は除く)

(これらの休業日には FAX 受領は行いが登録は翌業務日となる場合がある)

[症例登録等に関する問い合わせ]

進 伸幸・野村弘行

慶應義塾大学医学部産婦人科

〒160-8582 東京都新宿区信濃町 35

TEL: 03-3353-1211 (内線: 62386) FAX: 03-3353-0249

e-mail: jgog2043@jgog.gr.jp

[3]. 登録に際しての注意事項

- ・ プロトコル治療開始後の登録は例外なく許容されない。
- ・ 「症例登録用紙」の記載が不十分な時は、全て満たされるまで登録は受けられない。
- ・ JGOG 登録センターで適格性の再確認がされた後に「登録結果確認票」が発行されるが、この「登録結果確認票」の送付をもって登録とする。
- ・ 一度登録された患者の登録取り消し(データベースからの抹消)はなされない。重複登録の場合も初回登録情報(登録番号、割付群)を採用する。
- ・ 誤登録、重複登録が判明した場合には速やかに JGOG 登録センターに連絡すること。

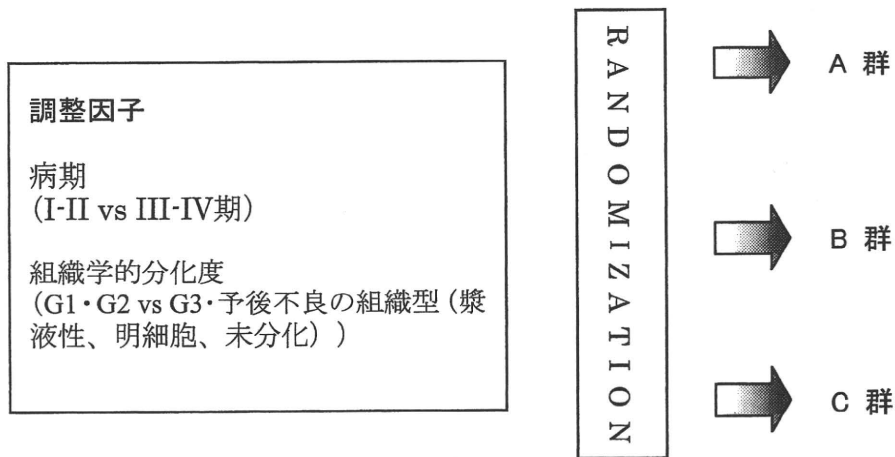
[4]. 症例割付

動的ランダム割付にて投与群が決定される。

下記調整因子に基づいて最小化法にて A 群、B 群、C 群 の 3 群に 1:1:1 の割付を行う。

1) 病期 (I-II vs III-IV 期)

2) 組織学的分化度 (G1・G2 vs G3・予後不良の組織型(漿液性、明細胞、未分化))



5.1.3 治療スケジュール

登録後、7日以内、可及的速やかに下記の化学療法を開始すること。

A 群:

AP 療法: doxorubicin + cisplatin			
Doxorubicin	60 mg/m ²	iv	day 1
Cisplatin	50 mg/m ²	iv	day 1
3 週ごとに 6 コース			

B 群:

DP 療法: docetaxel + cisplatin			
Docetaxel	70 mg/m ²	iv	day 1
Cisplatin	60 mg/m ²	iv	day 1
3 週ごとに 6 コース			

C 群:

TC 療法: paclitaxel + carboplatin

Paclitaxel 180 mg/m² iv day 1

Carboplatin AUC 6 iv day 1

3 週ごとに 6 コース

[1]. 投与量および投与スケジュール

[1-1] 投与量の算出方法

投与量の算出に用いる体表面積は「DuBois の計算式」より求める。(別紙 10 参照)

ただし、薬剤投与量を計算する際の体表面積は 2.0m²を上限として用いる。

1) ADM、CDDP、PTXおよびDOCの投与量

体表面積あたりで算出された投与量を 小数点以下を切り捨てて決定する。

2) CBDCAの投与量

Calvert の計算式を用いて算出し、この投与量から、小数点以下を切り捨てて決定する。

また、算出された CBDCA 投与量は 1000mg/body を上限量とし、それ以上の投与量が算出された場合はすべて 1000mg/body とする。

$$\text{CBDCA 投与量 (mg/body)} = \text{目標 AUC 6} \times (\text{GFR} + 25)$$

GFR に関しては、Jelliffe の計算式を用いた値を代入することとする。

$$\text{GFR} = \frac{98 - 0.8 \times (\text{年齢} - 20)}{\text{血清クレアチニン}} \times \frac{(\text{体表面積}^\#) \times 0.9}{1.73}$$

$$\# : \text{体表面積 } m^2 = 71.84 \times H^{0.725} \times W^{0.425} \times 10^{-4}$$

[W = 体重(kg); H = 身長(cm)]

DuBois: Arch Intern Med 17:863,1916

(体表面積算定表を参照ください)

なお、血清クレアチニンは複数回の検査値を用いることが望ましい。

原則として試験実施計画書治療開始後は、血清クレアチニン値が 1.5mg/dL を超える異常変動を認めない限り補正は行わない。

3) 体重変動による投与量補正

治療開始後の体重変動については、登録時の体重に比して +/- 5 kg 以内の場合は投与量の補正は行わないが、+/- 5 kg を超える体重変動が見られた場合は、再度体表面積および GFR を計算して投与量を決定する。

[1-2]. A群:ADM + CDDP

ADM	60 mg/m ²	1 日目に 10 分以内で静脈内投与する。
CDDP	50 mg/m ²	1 日目に 120 分以上かけて静脈内投与する。

上記を 1 コースとして 3 週ごとに 6 コース投与する。

a) 投与方法

- 1) ADM 必要量(60 mg/m²)を注射用水または生理食塩液に溶解し、10 分以内で(点滴)静注する。
- 2) 240 分かけて 1000 mL の電解質開始液(生理食塩液もしくは 1/2 生理食塩液に相当)を投与する。
- 3) CDDP は、原液で必要量 (50 mg/m²)を抜き取り、500-1000 mL の生理食塩液またはブドウ糖—食塩液に混和し、120 分以上 180 分以内で点滴静注する。
- 4) CDDP 投与終了後、240 分かけて 1000 mL の電解質開始液(生理食塩液もしくは 1/2 生理食塩液に相当)を投与する。

b) 輸液の投与

輸液は、通常の CDDP 投与に準じた方法で実施する。

CDDP に対する輸液(添付文書より抜粋)

- 1) CDDP 投与前、1,000~2,000 mL の適当な輸液を 4 時間以上かけて投与する。
- 2) CDDP 投与時、投与量に応じて 500~1,000 mL の生理食塩液またはブドウ糖—食塩液に混和し、2 時間以上かけて点滴静注する。なお、点滴時間が長時間に及ぶ場合には、遮光して投与すること。
- 3) CDDP 投与終了後、1,000~2,000 mL の適当な輸液を 4 時間以上かけて投与する。
- 4) CDDP 投与中は、尿量確保に注意し、必要に応じてマンニトールおよびフロセミド等の利尿剤を投与すること。

CDDP による腎毒性予防として万全を期すためには、2 日目にもある程度腎血流量を維持し、利尿を図ることが必要と思われる。しかし、本治療は後述のように嘔気・嘔吐や食欲不振を来す可能性が高く、2 日目に水分摂取不足とともに脱水傾向に陥ることも十分予測される。よって、少なくとも 2 日目までは十分量の輸液を行うことが望ましい。

c) 悪心・嘔吐対策

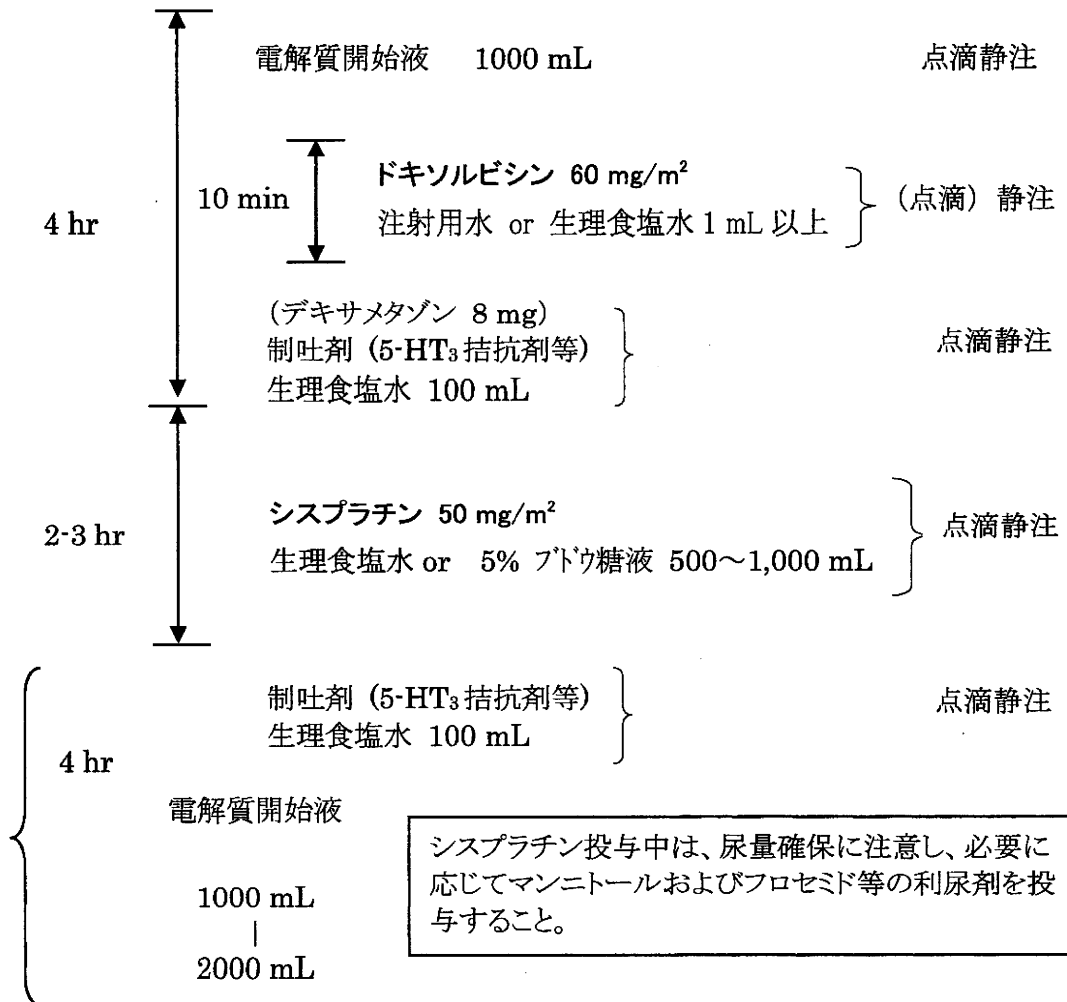
5HT₃ 受容体拮抗薬(オンダンセトロン、グラニセトロン等)、それ以外の制吐剤(ステロイド、メクロプラミド、ドンペリドン、ロラゼパム等)の積極的な予防投与を行うことが推奨される。

具体的には、急性期嘔吐(治療開始後 24 時間以内の嘔吐)を予防するために、1 日目に 5-HT₃ 受容体拮抗薬とともに 8~20mg のデキサメタゾンを静注もしくは経口投与することが推奨される。さらに、遅発性嘔吐(治療開始後 24 時間以降の嘔吐)を予防するためには、2~4 日目にかけて 4~8mg のデキサメタゾンを 1 日 2 回静注もしくは経口投与し、さらに 0.5mg/kg のメクロプラミドを 1 日に 2~4 回静注もしくは経口投与することが推奨される。ちなみに 0.5mg/kg のメクロプラミド投与においては錐体外路症状(薬剤性パーキンソンニズム)をきたすこともあるため、予防として塩酸プロメタジン(ヒベルナ®)やピペリデン(アキネトン®)を併用することが有用である。

《参考》 投与スケジュール

A群:ADM + CDDP

第1日目



5HT₃拮抗剤、ステロイドあるいはメクロプラミドの併用投与を積極的に実施する。

[1-3]. B群:DOC + CDDP

DOC	70 mg/m ²	1日目に 60 分以上かけて静脈内投与する。
CDDP	60 mg/m ²	1日目に 120 分以上かけて静脈内投与する。

上記を 1 コースとして 3 週ごとに 6 コース投与する。

a) 投与方法

- 1) はじめに DOC 70 mg/m²を投与する。投与時には、原則として添付溶解液全量に溶解して 10 mg/mL の濃度とした後(タキソテール注バイアルに、添付溶解液全量をを加えて澄明で均一になるまでゆっくりと泡立てないように転倒混和する(約 45 秒間)溶液が均一であることを確認後、ある程度泡が消えるまで数分間放置する。この溶液(プレミックス液)は 1mL 中に 10mL の DOC を含有する)、このプレミックス液から必要量を注射筒で抜き取り、直ちに 250 または 500 mL の生理食塩液または 5%ブドウ糖液に混和し、60 分以上 120 分以内で点滴静脈内投与する。(調製時に添付溶解液を使用する場合には必ず全量使用すること。)

添付の溶解液にはエタノールが含まれているので、アルコールに過敏な患者に投与する場合は、下記の方法によりプレミックス液の調整を行うこと。

<5%ブドウ糖液または生理食塩液使用の場合>

タキソテール注の 80 mg バイアルには 7 mL、20 mg バイアルには 1.8 mL の生理食塩液または 5%ブドウ糖液を加えて激しく振り混ぜ、バイアルを倒立させ、ある程度泡が消えるまでバイアルを倒立させて放置(約 10 分間)し、溶液が均一であることを確認する。均一でない場合は均一になるまで混和を繰り返す。この澄明で均一な溶液は 1 mL 中に 10 mg の DOC を含有する。

- 2) DOC 投与終了直後より、180 分かけて 750~1000 mL の電解質開始液(生理食塩液もしくは 1/2 生理食塩液に相当)を投与する。
- 3) 輸液終了後、CDDP を原液で必要量 (60 mg/m²)を抜き取り、500-1000 mL の生理食塩液またはブドウ糖-食塩液に混和し生理食塩液の側管として同時に、120 分以上 180 分以内で点滴静注する。
- 4) CDDP 投与終了後、240 分かけて 1000 mL の電解質開始液(生理食塩液もしくは 1/2 生理食塩液に相当)を投与する。

b) 輸液の投与

輸液は、通常の CDDP 投与に準じた方法で実施する。

CDDP に対する輸液(添付文書より抜粋)

- 1) CDDP 投与前、1,000~2,000 mL の適当な輸液を 4 時間以上かけて投与する。
- 2) CDDP 投与時、投与量に応じて 500~1,000 mL の生理食塩液またはブドウ糖-食塩液に混和し、2 時間以上かけて点滴静注する。なお、点滴時間が長時間に及ぶ場合には、遮光して投与すること。
- 3) CDDP 投与終了後、1,000~2,000 mL の適当な輸液を 4 時間以上かけて投与する。
- 4) CDDP 投与中は、尿量確保に注意し、必要に応じてマンニトールおよびフロセミド等の利尿剤を投与すること。

CDDP による腎毒性予防として万全を期すためには、2 日目にもある程度腎血流量を維持し、利尿を図ることが必要と思われる。しかし、本治療は後述のように嘔気・嘔吐や食欲不振を来す可能性が高く、2 日目に水分摂取不足とともに脱水傾向に陥ることも十分予測される。よって、少なくとも 2 日目までは十分量の輸液を行うことが望ましい。

c) プレメディケーション

DOC 投与の際のアレルギー、浮腫予防のためのステロイド剤の投与は各施設任意とするが、積極的に行ってよい。参考として具体的な投与例を次に示す。

<参考例>

デキサメタゾン 8 mg/日(分 2)を投与前日から投与翌日までの 計 3 日間経口投与する。

d) 悪心・嘔吐対策

5HT₃ 受容体拮抗薬(オンダンセトロン、グラニセトロン等)、それ以外の制吐剤(ステロイド、メクロプラミド、ドンペリドン、ロラゼパム等)の積極的な予防投与を行うことが推奨される。

具体的には、急性期嘔吐(治療開始後 24 時間以内の嘔吐)を予防するために、1 日目に 5-HT₃ 受容体拮抗薬とともに 8~20mg のデキサメタゾンを静注もしくは経口投与することが推奨される。さらに、遅発性嘔吐(治療開始後 24 時間以降の嘔吐)を予防するためには、2~4 日目にかけて 4~8mg のデキサメタゾンを 1 日 2 回静注もしくは経口投与し、さらに 0.5mg/kg のメクロプラミドを 1 日に 2~4 回静注もしくは経口投与することが推奨される。ちなみに 0.5mg/kg のメクロプラミド投与においては錐体外路症状(薬剤性パーキンソニズム)をきたすこともあるため、予防として塩酸プロメタジン(ヒベルナ®)やピペリデン(アキネトン®)を併用することが有用である。

《参考》 投与スケジュール

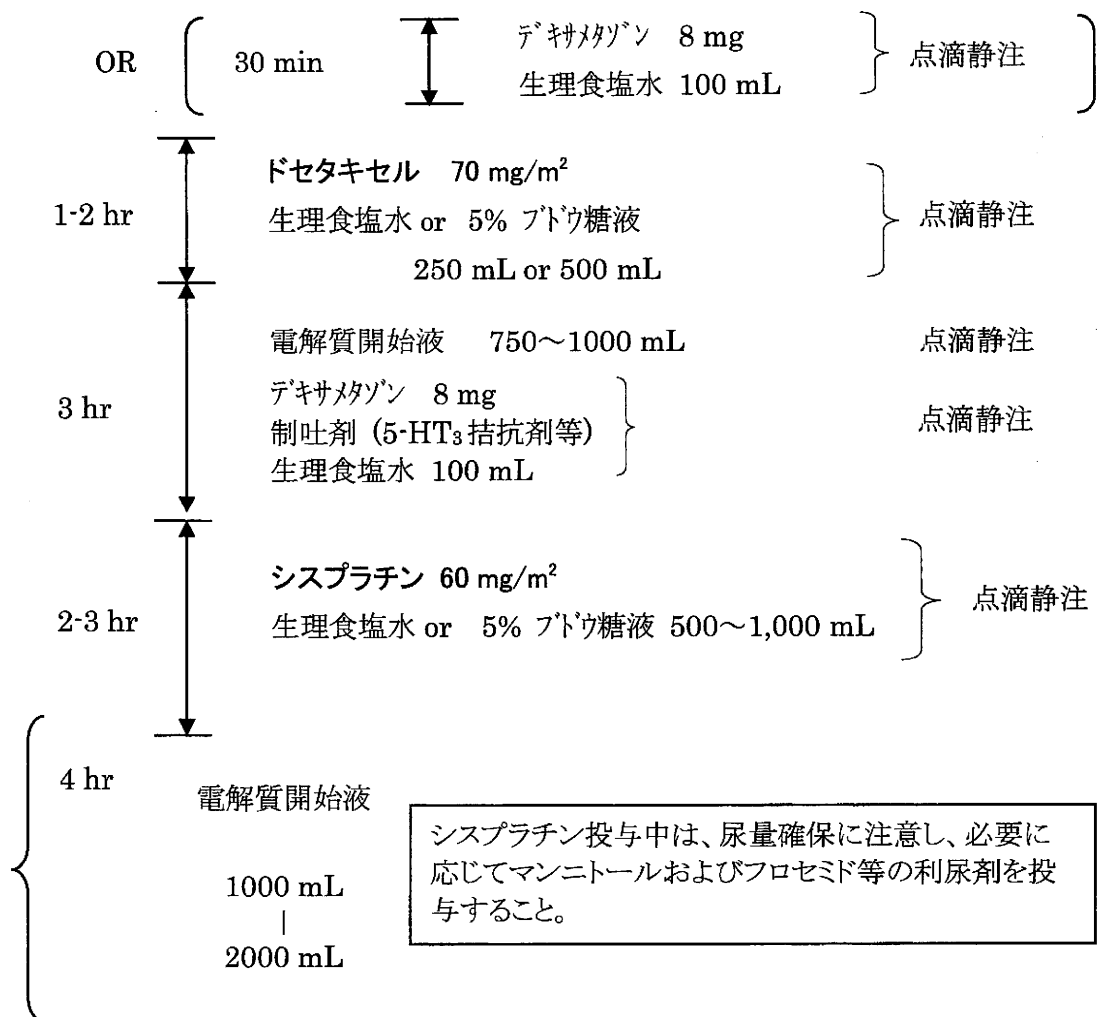
B 群: DOC + CDDP

投与前日

第 1 日目

夜 デキサメタゾン 4 mg 経口投与
朝 デキサメタゾン 4 mg 経口投与

デキサメタゾンは 8 mg を DOC 投与開始 1 時間前に点滴静注してもかまわない。



デキサメタゾン4mgを DOC 投与終了 12、24、36、48 時間後に経口投与する。

5HT₃拮抗剤、ステロイドあるいはメクロプラミドの併用投与を積極的に実施する。

[1-4]. C群:PTX + CBDCA

PTX	180 mg/m ²	1 日目に 3 時間かけて静脈内投与する。
CBDCA	AUC 6	1 日目に 1-2 時間かけて静脈内投与する。

上記を 1 コースとして 3 週ごとに 6 コース投与する。

a) 投与方法

- 1) プレメディケーションを行い、過敏反応等の出現が認められないことを確認の上、PTX 180 mg/m² を 250-500 mL の 5%ブドウ糖液あるいは生理食塩液に溶解し、3 時間で点滴静脈内投与する。
- 2) PTX 投与終了直後からカルバートの式を用いて算出した CBDCA 量を 250 または 500 mL の 5%ブドウ糖液あるいは生理食塩液に混和し、1-2時間かけて点滴静脈内投与する。

b) ショート プレメディケーション(short premedication)

PTX 投与に伴う重篤な過敏症を防止するため、PTX 投与前に必ず前投薬の投与を行うこと。PTX 投与 30 分前にリン酸デキサメタゾンナトリウム注射液 (デキサメタゾンとして 20 mg) を静脈内投与し、併せて塩酸ジフェンヒドラミン錠 (塩酸ジフェンヒドラミンとして 50 mg)またはマレイン酸クロルフェニラミン (マレイン酸クロルフェニラミンとして 2mg)を経口投与、塩酸ラニチジン注射液 (ラニチジンとして 50 mg)または注射用ファモチジン (ファモチジンとして 20 mg)を静脈内投与すること。

c) PTX投与時の使用器具

PTX 投与時には、0.22 ミクロン以下のメンブランフィルターを用いたインラインフィルターを通して投与すること。また、点滴用セット等で PTX の溶解液が接触する部分に、可塑剤として DEHP [di-(2-ethylhexyl)phthalate:フタル酸ジ-(2-エチルヘキシル)] を含有しているものの使用を避けること。

《参考》 投与スケジュール

C 群: PTX + CBDCA

第 1 日目

